
俺とお嬢様と、時々親友（仮）

水無紫苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とお嬢様と、時々親友（仮）

【Nコード】

N6243D

【作者名】

水無紫苑

【あらすじ】

過去のしがらみ（内容はまだ決めてないw）から彼女を作らないと決めている主人公：村上敬幸をあの手この手で振り向かせようとするお嬢様：青葉香織を描くドタバタらぶコメ（の予定）。

第1話 告白（前書き）

はじめまして

このお話は暇潰しで他サイトにUPしていたものを加筆修正したものです。

初めての挑戦でどうになるか分かりませんが、もしよろしければお付き合い下さい。――＊――

第1話 告白

「好きです！結婚して下さい！」

「・・・え・・・無理」

これが俺とあいつの初めての出逢いだった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

あの事件（俺にしては充分事件だ）から数日後の朝。俺は普通に親友と駄弁っていた。

1年から2年にあがったばかりとはいえ、クラス替えがあったわけでもなく、まわりはいつもと同じ顔ぶれ・・・になるハズだった。一部を覗いて・・・

「つーか、お前。なんでここにいるんだ？俺、ちゃんと断ったよな？」

目の前にあるイスを反対に向けて我が物顔で占領している女の子。先日いきなり告白して来た女の子がこの子だ。

断るにしても言い方があったかもな、と少し反省していたのだがそれも杞憂きゆうに終わった。

そして本来のその女の子が座っているイスの所有者であるハズの俺の親友は何も文句すら言わず、いや、なんかニヤニヤした目を向けながらこの状況を楽しんでいるふしすらある・・・

俺、友達の人選を間違えたかもしれない。

「わ、私は諦めてなんかいません！」

「そうよ！なんの文句があるって言うの！？バカ兄貴にはもったいないくらいなんだからね！」

そう、今日はいいつの隣に強力な援軍があつた。

まあ、俺の妹ともいうのだが、二日前の入学式で初めて会ったはずなのにもう数年来の親友なんだとばかりに二人して俺に詰め寄ってくる。

「お前らな・・・」

きくんこおくんかくんこおくんくく

「はいはい、予鈴なつたから、そろそろ教室に戻りなさい。ほら」

「むゝ今日は戻りますけど、ちゃんと考えておいて下さいね？私本気なんですから！」

とかいいながら二人して自分の教室に戻って行く。

「またねゝ」

「おい！」

さわやかに別れの挨拶をしている隣のニヤついた顔にツツコミを入れながら抗議してみる。明らかに楽しんでいるのだから全く意味がない無駄な行為だと知りながら。

「ははは、予鈴に救われた？w でもさあゝ。なんでそこまで邪険にするわけ？可愛いじゃん？」

と自分の席を奪還しつつやっぱりニヤついた顔をしながら聞いてきた。

「うつさいわw んゝ可愛いのは認めるけど、、タイプじゃないって事にしてくれ。分かるだろ？」

「ふうん、お前の好みねえ・・・」

「別にロリコンでもいいじゃない？」

「おい！っーか、いきなりなんだよ」

今度は隣の席から興味津々な顔で割り込んできた親友に軽くツツコミをいれつつ教室に入ってきた担任の声に従い教室中が静かになる。

俺は今後どうしたらいいのか考える中、朝のSHRが始まったようだ・・・

第1話 告白（後書き）

多分1話分はこれくらいの長さになります。

何話まで続くか分からないけど・・・

これとは他に似たようなお話を同時進行するので、そのお話と合わせて1週間に1話以上を目標にがんばりますw

（この先に待っているグダグダ感は見逃してください・・・おいw）

次回予告

第2話 あゝん？

それじゃこれから私のこと好きになってください！頑張りますから

第2話 あゝん？

「・・・で、なんでここにいるんだ？」

目の前で嬉しそうに箸でつまんだ玉子焼きを差し出してくる女の子がいる。

今は午前中の授業が終わって昼休み。ついさっきまで教室で友達と机を並べて購買で買ってきたパンを食べていたハズだ。

「はい、あゝん？」

「いや、だから・・・」

全く聞いてない。

「なんでここにいるんだと聞いてるんだ！」

「一緒にお弁当食べてるんです はい、じゃ、あゝん」

「微妙に答えになってないだろ！！ たく・・・」

クスクスクスクス・・・

「お前ら・・・」

横に目線を移してみると今にも爆笑しそうな顔、顔、顔。

こいつら他人事だと思いやがって・・・いや他人事なんだろうけど。

「あのな、朝も言ったけど、ちゃんと断つただろ？悪いけど、お前の事はなんとも思っていないだ。分かるだろ？」

「それじゃこれから私のこと好きになってください！頑張りますから」

「頑張るってお前。それはなんか違うくないか？」

「これもちゃんとしたアピールです！間違っただけじゃないです！」

「クッククク、少しくらい妥協したら？ほら、玉子焼きが待ってる

ぞ？」

「お前は黙つとけ！」

隣で机を叩きながらももう明らかに笑っている親友にマジツッコミを頭に叩き込む俺。

まさしく四面楚歌状態なんだがどうしよう。

ああ、すっかり忘れていた。俺の名前は村上敬幸^{むらかみ たかゆき}。私立星雲高校に通うごく平凡な高校2年生。（そうだと信じたい）言うまでもなく共学の高校で一応進学校でもある。本当は家から一番近い男子校に行こうとしていたのだが、仲の良い親友（そこで笑いを噛み殺しているヤツとか・・・）に「大切な青春時代になんで野郎ばつかの監獄にいけないといけないんだ！」とマジ顔で説得され、なし崩しのこの学校に進学した。まあ自分でもよく合格できたなあ〜と感心するところだ。

そして目の前にいる初対面でプロポーズしやがった、このネジが1つ足りないんじゃないかという女の子が青葉香織^{あおは かおり}。（数分前に始めて聞いた。順序逆じゃね？）容姿は・・・まあおいおい分かるだろうから省略する。玉子焼きを差し出している今の状態からは想像すら出来ないがれっきとしたお嬢様で本人曰く^{いわ}『庶民派』らしいのだが、どこの世界に専用の運転手にベンツ（しかも真っ赤）で送り迎えしてもらっている庶民派がいよう。そもそも庶民派とかいう庶民がどこにいるか・・・

と軽く自己紹介（？）した所で今の状態は変わらない。

目の前には嬉しそうに玉子焼きを差し出している青葉香織。横にはもう完全に爆笑している悪友（親友からランクダウン？）のシヨウとナオト。そして青葉の横では何故か機嫌が悪い妹の沙織^{さおり}が黙々と弁当を食べている。

・・・え？

「おい、沙織。なんでお前弁当食ってんだ？」

とりあえず目の前にある玉子焼きは無視してみた。

「食べてちゃ悪い？あるから食べてるんだけど？」

質問を疑問形で返す我が妹。

「いや、なんで弁当があるんだ？」

「作ったからに決まってるじゃない！兄貴もうポケ始めたの？」

「いつの間に・・・ていうか、俺のは？」

「いるなんて聞いてないけど？ていうか、欲しいなら朝ちゃんと起きて自分で作れば？」

いや、ごもつとも・・・だがなんだが納得出来ない。

「1つ作るもの2つ作るのも同じようなもんなんだし、ついでに俺のも作ってくれたっていいじゃないか・・・」

「ふん、気が向いたらね」

そもそも俺は兄貴としてこんな扱いで大丈夫なのか？

そして俺は目の前の女の子が目を光らせた事には全く気が付かなかった・・・

「それじゃ、私たちはそろそろ教室に戻りますね」

なんだか理不尽な扱いに落ち込んでいたとこと、頭の上からそんな声がかかった。

気が付けば目の前にあった玉子焼きは消えており、弁当を片付け教室に戻る準備を整えた青葉と沙織の姿。いつの間にか二人とも昼飯を食べ終わっていたみたいだ。

「お、おう・・・」

気のない返事をしつつ右手を軽く上げる。

教室の時計を見ると知らないうちに予鈴も鳴っていたらしく、俺は急いで残っていたパンにかじりつこうとした・・・が、ふと手が止まった。

パンの上にちよこんと玉子焼きがお行儀良くのせてあった。

正直、旨かった。とても意外な気がした・・・

第2話 あゝん？（後書き）

次回予告

第3話 手作り弁当

これから花見でもするのか？

第3話 手作り弁当

「で、これはなんだ？」

なんかこのセリフはデフォルメ化してはないだろうか。常に同じ事を言っているような気がする・・・

「お弁当です　もちろん私の手作りですよ　」

「・・・これから花見でもするのか？」

なぜか俺の机を占領している3段の重箱。

一番上は・・・中華？春雨やシユウマイやエビチリまでがぎっしりとつまっている。

二段目は・・・おせちだろうか？なんだかめでたそうな料理が並んでいる。よくもまあここまで食材を揃えたものだ。

一番下が・・・フルーツの盛り合わせ。林檎や蜜柑、パイナップルやアボガドまで、これを選び取りみどりと言うのではないだろうか？

なんていうか、全ての段にツツコミを入れたいんだが。。

「ところでお前、白飯は食わないのか？」

「あ・・・入れるの忘れました」

「おゝ俺も食べていい？」

「いただきます」

どこから現れたのか（まあ席が隣と前なのだが）、箸をのぼそうとしている悪友2人組・・・正確にはナオは既に春巻きを掴んでいる。

「それにしても凄いいえゝ！かなり早く起きて作ったんじゃない？」

「はい、朝5時に起きて作り始めたんですが、手際が悪くって・・・ついさっき出来ました！お昼に間に合ってよかったです」

「・・・弁当作りの為に重役出勤!？」

「香織ちゃんやるねえ」

呆れているシヨウと笑っているナオト。
んゝ分かりやすいやつらだ。

「よし、それじゃ俺は飯を食ってくる」

「ちょ、ちよつと待ったあゝ!!!!」

と席を立とうとした俺を慌てて押しとどめてくる。言うまでもなく、ちよつとネジが足りないお嬢様・・・見事なツツコミ!お前、吉本いけるんじゃないか?w

「なに・・・?」

「お昼はここにありますよ?(につこり)」

・・・その笑顔が怖いんですけど。。

「いらん。俺は食堂行ってくる」

「せっかく村上先輩の為に作ってきたんですよ?(うるうる)」

「そんな事頼んだ覚えもないし、それに弁当作るために遅刻してくるとか、何考えてるんだ?」

「で、でも!村上先輩の為に作ってきたんですよ!?少しでもいいから食べてくださいよ!？」

俺は無視して席を立とうとするが腕に絡み付いて離れないお嬢様。

「やめる。離せよ」

「・・・」

青葉が一瞬息を呑んだのが分かったが、敬幸は気付かなかったかのようになににも固まったお嬢様を振り払って食堂に向かった。

「お、おい!ちよつと待てよ!!!!」

あとから追いかけてきたらしいナオトが追いついてきた。お嬢様の

お弁当は泣く泣く諦めてきたらようだ。まあ、問題ないので無視して歩き続ける。

「おい、急にどうしたんだよ!」

「なにが?」

「はあ、香織ちゃんが固まるハズよ」

「ん・・・?」

「その目。いい加減少しは落ち着け!」

「あ、ああ。悪い」

「まあいいけどよ。で、どうしたんだ?」

「付き合う気がないのに受け取れるわけないだろーが」

「んな極端な・・・気がないってのは伝えてるわけだし、それくらいいいじゃん」

「期待を持たせるのもどうかと思うぞ?」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

短い沈黙、その間にも俺たちは食堂に向かって歩き続けている。

その沈黙を先に破ったのはナオトの方だった。

「お堅いね」

「不器用ですから」

「あはははは! お前、まるで二重人格!!!」

「だまれ! 不器用だ言うてるだろーが!!!!」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「でも、もう少しくらい優しくしてやってもいいんじゃないか?」

食堂で俺は親子丼、ナオトはラーメンを持って席に着いた途端に口火を切られた。

「・・・・・・」

「とりあえず俺たちと同じ感覚で話してやれよ。お前の気持ちくら

いは分かつてるけど、言い方は悪いがいい機会じゃないのか？」

「・・・考えておく」

「そうか。ま、前向きにな。あと、今日の事はちゃんと謝っておけよ？向こうは何も知らないんだから」

「そうだな。考えておく・・・」

「またそれか」

はあくこれ見よがしにため息をつくナオト。

それから二人とも一言も口をきくこともなく、黙々と昼飯と向き合っていた。

第3話 手作り弁当（後書き）

次回予告

第4話 取るべき距離

青葉が俺のこと嫌いになったんならこれ以上波風立てない為にも今のままがいいんじゃないのか？

第4話 取るべき距離

「なあ、あれからどれくらいになる？」

「・・・1週間くらいじゃないか？」

「もうそんなに経ったかあ・・・なんか最近面白くないんだよね」

「そうだな・・・」

俺の隣でナオトとシヨウが好き勝手にぼざいてやがる。ついさっきまで違う話題で盛り上がったじゃないか。

「で、ユキ。お前はどれくらい会ってないんだ？」

「ん？お前と同じ」

ナオトの質問にそっけなくかえす。

「は？お前、もしかしてまだ謝ってないのか！？」

「ん？ああ、そうだな・・・」

「おい！！！！」

「なんだ？」

「なんだ？じゃねえだろ！！なんで謝ってないんだよッ！！！」

「・・・会ってないから」

「じゃあなんで謝りに行かないんだよッ！！！」

「ちよつと待て、なんでお前が熱くなってるんだよ？」

「おま・・・謝るって言うってたじゃないか・・・」

いくらか冷静になったナオトが聞いてくる。

「そうだな。ただ、青葉が俺のこと嫌いになったんならこれ以上波風立てない為にも今のままがいいんじゃないのか？」

「・・・本気で言ってるのか？」

「本気も何も、この状況で俺にどうしろって言うんだよ？君の事好きにはなれないけどって言うって謝りに行くのか？キラいな俺に会う

事もなくホッとしてるかもしれないだろ？」

「おい！！！」

いきなりナオトは立ち上がり胸倉を掴んで来た。

「お前、香織ちゃんの気持ち考えた事あるのか！？あの子本気だったぞ！？例えあの事で嫌われたんだとしてもきちんとして謝るべきだろッ！？」

「じゃあお前は俺のこと考えた事があるのかよッ！？」

「・・・・・・・・ッ！？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「はいはい、ナオトもそれくらいにしろ。みんなもごめんねえゝなんでもないから」

シンと静まり返っていた教室で一番に口を開いたのはシヨウだ。ナオトの手を俺の胸倉からどかし、教室で事の成り行きを啞然として見ていたクラスメートにも軽く謝るとクラスメートたちも安心したのか教室中が元の喧騒へと戻った。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「はあゝ悪い。ちよつと待ってる」

まだ睨みあつて二人にため息をつくシヨウはそう言つて席を立ち、少し離れた所で電話をかけた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「悪い。ちよつとやりすぎた・・・」

「いや・・・」

この間数秒、程なくして重い空気を打ち破るかのようにシヨウが帰ってきた。右手に持った携帯電話はまだ通じているようで、一言二

言話すとその携帯電話を俺に突き出してくる。

「？」

「はい、悪いがちょっと出てくれ」

「????」

わけも分からず俺は携帯を耳に当てた。

「もしもし？」

「ッ!？」

その瞬間息を呑むような気配がし、電話が切れた。

プーッ、プーッ、プーッ、プーッ

(なんだ????)

「・・・切れたけど、いったいなんだったんだ？」

「そうか・・・」

眉間に皺をよせたような表情をし、シヨウは残念そうにつぶやいた。

「????」

「シヨウ????」

俺もナオトも、シヨウが何をしたかったのか全く分からなかった。

第4話 取るべき距離（後書き）

ネット小説ランキングに参加してみましたw

良かったら下の投票欄をポチッとよろしく願いますo(――|――|――o)

次回予告

第5話 私の初恋

でもこの時、はっきりと気付いた。私、サオちゃんのお兄さんの事が・・・

第5話 私の初恋

またやってしまった・・・

入学式当日、思い切って先輩に会いに行った。

あんな事言うつもりはなかった。

でも、かなり緊張していた。

『好きです。お付き合いしてください』

そう告白するつもりだった。

なのに、口から出たのは違う言葉だった。

『好きです！結婚して下さい！』

頭の中が真っ白になっていたとはいえ、自分でもどうかと思う。

いきなりプロポーズするなんて・・・

それからというものの、私はかなり焦っていた。

失態を挽回しないといけなかったし、私の事をちゃんと見て欲しかった。

たった今、意味も分からずサオちゃんから受け取った携帯電話を耳に当てた途端、先輩の声がした。そして再び私の頭は一気に大混乱。無意識に通話を切ってしまった。

あの日、食堂に行こうとする先輩を止めようと腕を取った時、一瞬にして恐ろしさを感じ金縛りにあったかのように身体が固まってしまった。あの何も信じられないといった冷めた目も怖かったが、やはり本気で先輩に嫌われてしまうといった恐怖の方が勝まさった。

それからというもの、私は完全に塞ぎ込んでいた。今もサオちゃん
が心配そうな顔を浮かべているし、ずっと落ち込む私についていて
くれている。先輩に会いに行こうと手を引かれていった時もあるけ
ど、これ以上に嫌われてしまったらと思うと先輩のいる校舎の入り
口から先に入る勇気が出なかった。

先輩は入学式の日に会ったのが初めてだと思っているだろう。でも
それは違う。

見たことがある程度だが幼稚園の頃から私は知っている。そもそも
サオちゃんと私は幼馴染だという事にすら気付いていない気がする。
私は『お友達のサオちゃんを公園まで迎えに来ているお兄ちゃん』
を何度か見ているのだ。

一人っ子の私にとって、お兄ちゃんに向かって嬉しそうに駆けてい
るサオちゃんがかかなり羨ましかったし、サオちゃんを迎える優しそ
うなお兄ちゃんの顔が目には焼きついた。私にもこんなお兄ちゃんが
ほしいなあ〜と何度も思っていた。

そう最初はただの憧れだったかもしれない。

中学二年の冬、いつもなら絶対に乗らない満員電車に乗り合わせた
とき、隅の方ですし詰め状態で押しつぶされそうになっていた私を
偶然乗り合わせていた先輩が壁に腕を踏ん張って空間を作ってくれ
た事があった。もちろん私はサオちゃんのお兄さんだと気付いたが
先輩は私の事を知らないわけだし、気付く事はなかった。目的地で
なんとか電車から降り、私がお礼を言ったのを後ろ手を上げて去っ
ていっただけ。悔しかった。私の事を知ってもらいたいって本気で
思った。

これまでも家が比較的近かったせいか時々先輩を見かけることが
あったし、そんな時、知らず知らずのうちに決まって私は先輩の事

を目で追っていた。友達と思われる人と一緒に歩いてる時もあるけど、サオちゃんと一緒に歩いてる時も。サオちゃんと一緒に話しかけてみればいいと思う人もいるかもしれないが緊張して足が前に動かなかった。

今まで何でこんな気持ちになるのか分からなかった。

でもこの時、はつきりと気付いた。私、サオちゃんのお兄さんの事が・・・

そう、これが私の初恋。

第5話 私の初恋（後書き）

次回予告

第6話 さよなら

・・・お前の気持ちは嬉しかったが、俺は今恋愛は出来そうにないんだ。

第6話 さよなら

昼休み、俺はシヨウとナオトに連れられて1年の校舎まで来ていた。というか、俺の悪友二人が無抵抗の俺を1年の校舎に連れていくために荒縄で縛ろうとした事には驚いた。

『お前たちはこんな趣味があつたのか!?』

『俺を変な世界に引き吊り込まないでくれ!』

『変態プレイはお前たち2人で楽しんでくれ!』

などと騒ぎ立ててようやく逃れることが出来たのだ。

昨日シリアスな現場を目撃していたクラスメイトは昨日とは違った意味で啞然としていたが・・・

というか俺たちも昨日の今日でよくやるものだ・・・（まるで他人事）

「つたく、お前らまで来んでいいだろお」が

「まあまあ」

「お前・・・楽しがつてるだろ・・・」

「そんな事ないさあ」

ナオトの頭の上に音符マークが見えるのは気のせいだろうか・・・そんな事をしているうちに1年の校舎に到着した。そこでふと俺は足を止める。

「どうした? 怖い気づいたとかはなしだぞ?」

「いや、ナオト・・・青葉って何組だ?」

「は・・・? シヨウ?」

とナオトはシヨウに向かって振り返った。

「・・・ちよつと待ってる」

シヨウはそう言い残すと携帯電話を取り出しどこかへかけ始める。

「お前ら、手際悪いな」

「うつさい！お前こそ知つとけ」

とナオトと軽口を叩いているうちにシヨウの電話は終わったようだ。

「3組らしい。行くぞ！」

「さっすがシヨウ頼りになるねえ」

「お前は全く役に立ってないけどね・・・」

「・・・」

そうして俺は軽口を叩き合っている二人を置いて1年の校舎に入って行った。

俺は今1年3組の教室前にいる。悪友2人は俺がちゃんと向かっているのを確認するといずこかへと去っていった。一応空気は読めるみたいだ。

入り口付近にいた男子生徒に青葉を呼び出してもらつと青葉は沙織に付き添われながらやってきた。そして俺はそのまま青葉を連れ出し、今は屋上に二人して立っている。

「・・・」

「・・・」

もうそろそろ5月になるというのに屋上ではまだ冷たい風が二人の

頬を通り過ぎていった。

「・・・悪かったな」

「え・・・？」

「言い過ぎた。悪かった」

「うつん・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・じゃあな」

「え？ 待って！！！」

言うだけ言って屋上から立ち去ろうとする俺の前に青葉は回りこみ、少し興奮した声色で慌てて呼び止めた。

「あ、あの……」

「なんだ？」

「先輩……やっぱり先輩の事が好きです。私じゃダメなんですか？」

青葉は今にも泣き出しそうな顔をしながらも俺をじっと見つめながらはつきりした口調で再び告白してくる。青葉の気持ちがしつかりと伝わってくる分、俺も逃げるわけにはいかないと感じた。だから再びはつきりと答えを口にする。

「悪いな……」

「な、なんで……？」

青葉は少し青ざめた顔をしながら、それでも俺に詰め寄ってきた。

「……お前の気持ちは嬉しかったが、俺は今恋愛は出来そうにないんだ」

「え？」

「だから悪いな。これ以上一緒にいてもお前を傷つけるだけだろうから……」

「……」

「じゃあな……」

俺は青葉のふわふわした頭を2度3度ぼんぼんと叩きながら屋上の出口に向かった。

青葉は泣いているのかも追いかけてくる気配も見せず、俺も振り返ることはなかった。

屋上から校舎に入ったところでショウとナオト、それに沙織と出くわした。

「お前ら、見てたのか・・・」

「バカ兄貴ッ！！！」

そう短く叫ぶと沙織は青葉の元にかけていき、シヨウとナオトはそれをただ守っている。まあこの二人が青葉の元へ行っただとしても何も出来ないだろう。

「・・・今度は殴りかかってこないのか？」

自虐的に言った俺の言葉にナオトはキザったらしく肩をすこめたかと思うと、

「お前がちゃんと考えて決めた事だしな。これ以上俺がどうこう言えるわけがないだろう。それに・・・」

「・・・ん？」

「ふっ・・・」

ナオトとシヨウは意味深につぶやき、それぞれナオトは俺の右肩、シヨウは俺の左肩を軽く叩くとそれ以上何も言わずに立ち去った。

「お、おい！」

俺はわけが分からず取り残さる。

（っーか、あいつら立ち聞きしてた事ごまかして逃げやがったな？）

屋上ではまだ沙織と青葉が何か話をしている。慰めてでもいるのだろうか？

俺は静かにそこを立ち去って自分の教室に向かった。

ちょうどその時、昼休み終了を告げる予鈴が鳴り響いた。

第6話 さよなら（後書き）

ここまでで第1章完！って感じでしょうか。

でもまだ続きますw

よかったら今後もよろしくお付き合いください。〇（―――*）〇

次回予告

第7話 友達として

シヨウ・・・これはお前の差し金か？

第7話 友達として

「シヨウ・・・これはお前の差し金か？」

「・・・違う」

「俺の目見て言えるか？」

「・・・僕は独り言を言ったただけだ」

「何て・・・？」

「友達なら大丈夫な言い方だったな・・・って」

「・・・だからって、それをノムか??？」

俺はそのまま目の前にある重箱に目を移した。

その向こう側には飛びつきりの笑顔を向けている青葉がちょこんとイスに座っている。

本来そこに座るべきナオトは非難とばかりにさっさと席を譲って見物モード。少しくらい抵抗してくれ・・・

「というわけなので、一緒にお弁当食べましょ」

「・・・何が『というわけ』なんだ？」

「まずは私の事をよく知ってもらえるように頑張る事にしました
そして必ず敬幸先輩のハートをゲットなのです！」

軽くガッツポーズをしながら目の前にいる女の子はそうおっしゃった・・・

「・・・ということは？」

シヨウも反応しなくてもいいのに・・・

「今はお友達で我慢します！」

なんだかどつと疲れた出てきたような気がする。

「・・・」

前に青葉にも言った事だが、俺には恋愛は出来ないと思っている。
結果青葉を傷つけるだけだと思っているのだ。

俺は目の前で笑顔を向けている青葉に困り果ててどうすべきか隣にいるシヨウとナオトに目を向けて見る。二人ともうつすらと笑みのようなものを浮かべて見返してきた。それはもう『それくらい聞き入れてやれ。後悔する事になるぞ』と言っているようだった。お前等はお釈迦様か！と声を大にして問いかけたい！

「・・・もう好きにしろ」

「はい！好きにします」

「お前、なんかすごいな」

「ん？そうですか？ま、好きなんだからいいじゃないですか」

「それに思っただが、お前恥ずかしくないのか？そんな好き好きって・・・」

「にやはは」

青葉は少し頬を赤らめながらごまかすように笑っている。俺は少し癒された気がしたがもちろんそんな事は言わない。ただ呆れたような顔をしていた。

「というわけで、弁当タイムと行きましょうか」

「腹減った〜！」

「今日のおかずも凄いですね〜」

さっそく重箱の蓋を開け、今にも箸をのばそうとしているナオト、シヨウ、そして今日も青葉と共にやって来た妹の沙織。

「ところで、お前ら・・・何勝手に食おうとしてるんだ？それ青葉のだろ」

「いいんですよ先輩！ みんなで食べましょ　もちろん先輩もですよ？　今度こそちゃんと食べて貰いますからね　（にっこり）」

「お、おう・・・」

その『また逃げたらどうなるか分かってますよね?』と言っている様な青葉の笑顔に俺はそう答えるしかなかった。

こうして、初めて5人一緒に食べる昼食が始まった。

恋の一步を踏み出す事の出来た青葉はこれまでにないほどの満面の笑みを浮かべていた。

第7話 友達として（後書き）

次回予告

第8話 勝手な決め事

いいえ！婚約者としてもっとフレンドリーに呼び合っべきです！！

第8話 勝手な決め事

俺は今、真っ赤なベンツに乗っている。

まあ言うまでもなく青葉の車なのだが、目だつてしようがない。今も通りを歩いていてる学生が好きな目を向けている気がする。

その注目されている車の対面式のシートでは俺の目の前にはナオトとショウ、沙織が陣取ってなにやら楽しそうに話していた。そして俺の横には当たり前のように青葉が陣取っている。

「ねえねえ先輩！そろそろGWですゴールデンウィークね」

「青葉、何が言いたいんだ？」

「みんなでどこか遊びに行きませんか？」

「時間があればな」

「じゃあ決まりですね 軽井沢に別荘があるんです」

「いや、まだOKしたつもりは・・・」

「決まりですよね！」

「お、おう・・・」

ある意味宣戦布告を受けて数日、俺は出来るだけ青葉に向き合うようにしている。まあ、まだぎこちなさがあるだろうが、初対面が初対面だけにしようがない・・・と思ってくれ。

「やった サオちゃんも先輩方も大丈夫ですか？」

「もつちろ～ん 楽しみ～」

「俺もいいぞ」

「問題ない」

「それじゃ、4月の29日、朝8時に私の家集合ってことでよろしくお願いします」

「了解～～」
と暇人全員が賛成し、微妙に置いてけぼり感漂う俺を尻目にGWに
軽井沢旅行が決定した。

「ところで先輩？」

「なんだ？」

「『青葉』とか『先輩』とか、他人行儀だと思いませんか？」

「いや、なんの問題もないだろう？」

「いいえ！婚約者としてもっとフレンドリーに呼び合うべきです！
！！」

「・・・いつから婚約者になったんだ？」

「これから婚約者になる予定なんです！！！」

「おいおい・・・」

「というわけで、『たーくん』って呼んでもいいですか？」
「却下」

「ええ～～～！辻ちゃんだって彼氏さんのこと『たーくん』って呼
んでるじゃないですかあ～」

「いったい何の話だ？1つ言える事は他人は他人。俺は俺だ。」

「却下と言ったら却下だ」

「じゃあ、『タカクン』？」

「・・・無理」

「もう～なんですかあ～><！」

「無理なもんは無理！」

「それじゃなんだったらいいんですかあ～！（ぶう～）」

「そんなほつぺた膨らませてもダメなもんはだあ～め！」

と青葉のいじけた様にふくらませた頬を敬幸は両手で挟んで押しつ
ぶすした。

「でも・・・」

「ていうか、お前ついさつきも俺の事『敬幸先輩』とか言ってたじゃないか。それでいいじゃないか？」

「いいけど。私だけの特別な呼び名が欲しいです・・・（しゅん）」

まるで元気のなくなつた小動物みたいに落ち込む青葉。

「はあ・・・それじゃとりあえず『敬幸』ならいいぞ？」

「・・・え？」

「だから呼び捨てでもいいって言ってんだ。『たーくん』やら『タカクン』じゃ恥ずかしすぎるから。だから、今のトコ下の名前を呼び捨てで呼んでるヤツなんかいないし、それでいいだろ？ つか、これ以上の妥協はしない！」

「は、はい！」

「ん・・・」

笑顔で返事をする青葉、敬幸は青葉の頭を撫でながら、まあこれくらいならいいかと一件落着し安堵した。

「それじゃ、敬・・・幸・・・えへへ　なんか照れますね」

と頬を染める青葉の姿にちよつと見惚れてしまっている敬幸。しかし敬幸にとってははまだ一件落着したわけではなかった。

「敬幸は私の事『香織』って呼んでくださいね？」

「え、いや、俺は別にこれまでのまま『青葉』でいいぞ？」

「か・お・り！（につこり）」

「は、はい・・・」

こうして、半分くらい・・・いや半分以上強制で軽井沢旅行と敬幸と香織のお互いへの呼び名が決まった。

俺、このままでいいのだろうか・・・

第8話 勝手な決め事（後書き）

えーっと、突然ごめんなさい。

今日を最後にNETが使えない状況なり、少しの間更新が出来なくなりです^^；

携帯から更新しようと思ってたんですが、よく分からない。11
lorz（おいw

なので、読んで頂いてる方にも申し訳ありません。

恐らく3月中には再開できると思いますので、少々お待ちください
o（――*）o

次回予告

第9話 膝枕

お前、今の状況が分かってないだろ？

第9話 膝枕

（こんな鉄の塊が空を飛ぶなんてありえない！！！）

と、理系を選択している癖にこんな批判を脳内で連発している俺。いや、声に出したら白い目で見られる事は分かりきっている。でも無理なものは無理！分かるだろ？この気持ち。

軽井沢旅行出発の日、待ち合わせの青葉邸（家というより邸宅と言う方がしっくりくる）で俺たちが見たものは庭の一角にあるペリポートに留まっている巨大ヘリ。何ていうのかは知らないが、前部と後部の二箇所それぞれ2対ずつあるプロペラという時点で俺たちの認識している『ヘリコプター』と違う。内装もここはこの高級ホテルですか？って程広い。というか、ここが本当にヘリの中だとは考えられないほどの豪華さだ。俺はこの時点で不覚にも安心してしまっていた・・・

香織が軽井沢までヘリで行くと言い出した時、俺は一瞬硬直した。そして必死になって反対を表明した。高校生の交通手段じゃないだろうと、自分では至極最もな事を言っているつもりだった。しかし初めて乗るヘリコプターに興奮した沙織とナオトを筆頭にその場の全員が俺の主張を無視。ここに民主主義における俺の敗退が決まった。それでも内装を見てこれなら大丈夫かもしれないと思っていた。そう数分前までは・・・

この旅行にはショウやナオト以外にも俺のクラスメイトが参加して

いる。腰まである漆黒の髪には天使の輪が浮かび、清楚な雰囲気漂わせる彼女の名前は眞鍋梓織^{まなへしおり}。1年前、星雲高校の入学式で知りあい、同じクラス、席も目の前だったという縁から話をするようになった。シヨウやナオトたちと共に休日に遊びに行くこともあるほどの仲だ。まあ、女友達筆頭(？)みたいな感じだろうか？ちなみに、本人の前では言えないが俺的には男友達扱いだったりする。

その梓織は俺の左側で初めてのヘリコプターに興奮したナオトのマシンガントークを笑いながら聞き流している。俺の右側では窓の外の見ながらはしゃいだように騒ぐ沙織に苦笑いを浮かべながらも相槌を打っているシヨウ。そして俺はなるべく外が見えないようにうつむき、ガタガタと震えながら真っ青になっていた。

ヘリが浮かび始めて10秒後、まだ余裕。

それから20秒後、多分大丈夫。

1分後、すでに後悔し始めた俺。

ヘリが上空千メートルを超える高さを飛び始めてからはもう気分が悪いわ、眩暈^{めまい}がするような気がして・・・程なく完全グロッキー状態に陥った。

ついさっきまでは俺の隣で楽しそうに話しかけていた香織も、俺が何も反応を示さなくなった事に飽きたのか、何も言わず俺の左腕に自分の右腕を絡ませながら笑顔を振りまいている。普段なら腕を振りほどこうとするだろうが、今の俺はそんな余裕はない。シヨウもナオトも梓織も我が妹も、真っ青になっている俺に気付きながらも完全無視。香織に至ってはいつもは抵抗する俺が嫌がらないもんだから「今のうちに充電」とか言いながら普段簡単には出来ない事

を楽しんでいるフシが見える。・・・お前たち、俺の事が心配じゃないのか？ 俺、マジで死にそうなんだけど・・・「ははは、こんな事考えられるんならまだ余裕だな」そんな強がり进行しながらもだんだん目の前がブラックアウトしていく・・・既に限界を超えていたようだ。

みんなの笑った声が聞こえる。木々のザワザワとした音が聞こえ、ひんやりとした風が頬を撫でる。目を開けると青々と茂った大きな木の間から快晴の空が見えた。

気付いた時には既に軽井沢に到着しており、俺は日陰になった緑の芝生の上で寝ていた。みんなは少し離れたところでピクニックのようにシートを広げ昼食を取っている。

「あ、起きましたか？」

頭の上から香織らしき声が聞こえる。まだ完全に覚醒していない俺がボーっとしていると、

「みなさあゝん！ 起きたみたいですよゝ」

という声が再び頭の上から聞こえ、その声に反応するかのようにバタバタとこちらに近付いてくる足音が聞こえた。

「おはよゝ」

「よく寝てましたね」

「気持ちよかったか？」

思い思いの言葉を口にしながら近づいてくる御一行様。ちなみに、上から沙織、梓織、ナオトの順。

「んゝ・・・つか、最悪だったよ。気持ちいいわけないだろ。今もまだ宙に浮いてる感じがして気持ち悪い」

「お前、今の状況が分かってないだろ？」

「は・・・？」

そう、シヨウに指摘されて始めて気付いたのだが、俺は香織に膝枕された状態で眠っていたのだ。

「ちよっと、気持ちが悪いつてどついう事ですか！？」

香織が俺の言葉に反応して怒っているが、その声はなんだか嬉しそうでもあった。

見渡さずとも分かる。みんなのどのようにいじってやろうかと考えているようなちよっとムカつく顔。

そして、ついさっきまで文句を言っていた事も忘れて、香織が少し頬を赤らめながらも満面の笑みを浮かべている姿を。

第9話 膝枕（後書き）

というわけで無事（？）に再開することが出来ました。
待っててくれた人はいるのかなあゝ？いたらいいなあゝ・・・笑w
よかったら再びよろしくお願いします。（――＊）o

次回予告

第10話 西洋の城！？

あ、俺こんなラブホ見たことあるかも！

第10話 西洋の城！？

「ここは日本・・・だよね？」

「多分。俺も自信がなくなってきた・・・」

「これ、お城？」

「いや・・・どうかな？」

「あ、俺こんなラブホ見たことあるかも！」

「・・・それは絶対違う！！！！」

4人の見事な連携のツツコミを全身に浴び悶絶するナオト。

俺たちは青葉の別荘を見上げて唖然としていた。

そもそも香織が「私の別荘です」って言ったから別荘だと認識しているだけで、西洋の城だと言われた方がしっくりくるほどだ。

「ここでみなさんに残念なお知らせがありまゝっす！」

唖然としている俺たち5人に向かってこの別荘の所有者であるお嬢様が場違いのような声を上げた。

「・・・・・・・・・・・・」

「実は、お部屋は管理人さんにお掃除とかして貰ってて完璧なんです！〜食料を買って来るのを忘れちゃいました！！！」

「は？」

「だから、これから買いに行かなくてはいけません！」

「・・・・・・・・・・・・」

今度は違った意味で香織以外の一同は唖然となる。そして、その困難なミッションを考えて青ざめた。そう、さっき俺たちの目の前で俺たちが乗ってきたヘリは帰っていった。いつもこの別荘を管理しているという管理人さんには休暇を与えたらしくここにはいない。

今この場にいるのは俺たち6人だけという事になる。そしてこの玄関（？）から門まですら1キロはあろうかという上に、この別荘の

周りには肉眼では何も見えない。

「一応確認するが……ここから一番近い店までどれくらいかかるんだ？」

「んゝ．．．1時間．．．2時間もあればいけると思いますよ？
これからいけばギリギリって所でしょいか」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「お、そうだ！電話してさっきのへりにもう一度来てもらうつてのはどうだ？」

一同の沈黙を破ってさも名案だとばかりにナオトが提案する。

「いえ、もう今頃はお父様たちが移動に使っているはずですよ。どこに行くのかは知りませんが、無理ですね」

[illegible]

こうしてじゃんけんに負けた俺とナオトと沙織の3人が食料買出しの旅に赴く事になった。

5時間後、案内役がない為道に迷い、帰りは数日分の荷物を持ちながらの行軍に予定時間を1時間もオーバーした俺たち3人は重い足を引きずりながら別荘にたどり着いた。

「づがれだあ!!!」

「おそかったですね」

キッチンに倒れこむように荷物を置く俺たち三人に香織は何の労りもなくおっしゃる・・・さすがはお嬢さま。　　つーか、お前『庶民派』とか言つてなかったっけ？

「オメー全然地図あつてねえくじゃないかよ！」

「ええ、地図見間違えたんじゃないですかあ？」

「とりあえず、殴つていい??」

「暴力反対！うう・・・」

はぁ・・・泣き真似で逃げられた。

「つーわけで、飯の支度は留守番組でどうにかしてくれ」

「はぁーい！ わかりました」

「ゲンキなや・・・」

「何かいいました？」

「いいえ・・・」

こうして夜は更けて行くのであった・・・

ちなみに次の日、全身筋肉痛で遊ぶどころじゃなかったのは言うまでもない・・・

第10話 西洋の城！？（後書き）

次回予告

第11話 ホームラン！

だ、誰だよ。テニスは野球よりも簡単だって言ったヤツは・・・

第11話 ホームラン！

「ねえねえ香織ちゃん！近くに遊ぶところってないの？」

3日目の朝食後、これから何をして遊ぼうかと話している時にナオトが香織に聞いた。

「遊ぶところですか？ うーん、近くても送迎の車がありませんし、歩いて行くのは大変ですよ？」

「そっかーやっぱり無理か」

「別にそんなのいいだろ？ 昨日周りを歩いてみたけど、この家の敷地内にいろいろあるっばいぞ？」

そう言ったのはショウ。俺たちの知らないうちに別荘の中を散歩していたらしい。一瞬誘ってくれよ！とも思ったが、一昨日の俺はヘリに乗って失神し、買い出しで燃え尽きて使い物にならなかった。

そして昨日は全身筋肉痛。これは仕方ないかもしれない。ていうか、ナオトは昨日何してたんだ？

「そうなのか！？で、何があるんだ？」

この質問には再びこの別荘の持ち主である香織が答えた。

「そうですねーテニスコートとがありますよ？」

「テニス・・・俺した事な。簡単なの？」

「ラケットでボールを打つだけです。野球よりも簡単に当たると思いますよ？」

「よし、今日はテニスやるぞ！」

「おい、他のもあるんだし勝手に・・・」

同じくテニスをやったことがない俺が反対しようする。

「それじゃ今日はテニスですね！」

「よし！罰ゲーム決めるぞおー！」

「おい・・・」

こうして俺の言葉は聞こえなかったものとされ、テニスをする事が

決まった。

「つーか、罰ゲームって初めてテニスするくせにどこからそんな自信が出てくるんだ？」

「おいナオト！思いっきり振り回すバカがどこにいるんだ！！！」
俺が怒鳴るようにナオトの打った球はテニスコートを囲んでいるフエンスを軽く飛び越え、今日何度目か分からない場外ホームランになった。

「悪い悪い。思いっきり打った方が気持ち良くてな」

「お前、これじゃ試合にならんだろ・・・」

「まあまあ、てことでユキまた頼むわ」

「はいはい、つーか予め外あらかじにいた方がいいんじゃないかって思いはじめた・・・」

そう言いながら俺は再びナオトが放ったホームランボールを探しに行った。つーか、探す俺の見にもなって欲しい。大変なんだぞ？

結局、総当たり戦をして優勝香織、準優勝ショウ、3位梓織、全敗で断トツ最下位はナオトだった。

「だ、誰だよ。テニスは野球よりも簡単だって言ったヤツは・・・」

「はい！私です」

完全に愚痴りモードに入ったナオトに香織が笑顔で答える。いや、そこは元気に答える場面じゃねえぞ？

「あれだけホームラン打ってたら勝てないよね。安藤くん罰ゲームがんばってね」

梓織のトドメとも言える一言でナオトは完全に沈黙した。

罰ゲーム・・・自業自得だな。

第11話 ホームラン！（後書き）

次回予告

第12話 勇気と無謀

諸君！これより我々は玉砕を覚悟で任務にあたる事になる！

第12話 勇気と無謀

「それじゃ、安藤先輩の罰ゲームは『1人でお風呂に入る』でいいですか？」

ふと思い出したように香織が罰ゲームの内容の提案をした。ちなみに、『安藤』っていうのはナオトの名字でシヨウは杉原^{すきはら}って名字だったりする。

「それじゃ罰ゲームとして普通すぎないか？」
もつともらしい疑問を投げかける俺。

「えへへこれでもいいんです で、みなさんいいですか？」

みんなよく分かってないながらも賛成した。俺的にはナオトの罰ゲームなんかどうでもいいとも言えはどうでもいい。

「では、安藤先輩の罰ゲームは『1人でお風呂に入る』で 安藤先輩もそれでいいですね？」

「・・・・・・」

ナオトは相変わらずまだ燃え尽きたままで、無意識にだらうか頭が上下したような気がした。まあナオトに罰ゲームの拒否権なんかないんだけど・・・・

「それじゃ、温泉に行きましょう」

そして香織は当たり前のように話を続けた。

「え、近くにあるのか？」

「敷地内にあるんです もちろん源泉たれ流しですよ！」

・・・マ、マジっすか？ていうか、たれ流さないで下さい。普通にかけ流してよ・・・

「よし！今から温泉行くぞ！すぐに温泉行くぞ！！！」

「ナオト、いつ復活したんだ？」

「そんな細かい事気にするな！さっさと温泉行く準備しろ！」

「お前、いつから温泉好きになったんだ？」

「何を言う心の友シヨウよ！俺は昔から温泉大好きだぞ？」

「初めて聞いた……」

俺とシヨウの言葉が重なった。

そしてふいに香織の声がかけられた。

「安藤先輩？先輩は“1人でお風呂”ですよ？」

につこり笑顔の香織はちよつと、怖かった……

カポーン……

青葉家の温泉。

水の流れる音と、鹿威^{ししおど}しの音が響き渡る。風流とかは分らないが、水の音と竹が石を叩く音が心地よく身体に流れて来て、見渡せば枯山水など視覚も楽しむ事が出来、これぞ日本の庭園って感じがする。正直、西洋の城に温泉なんてって思ったけど、下手な高級旅館の温泉よりも日本っぽいかもしいない。この場所だけ。

そんな静かで趣^{おもむき}の溢れる温泉に場違いとも思えるくぐもった声が聞こえる。

「諸君！これより我々は玉砕を覚悟で任務にあたる事になる！」

「……」

「……」

ところで、なぜここにナオトがいるのだろうか？確かに別荘内にある風呂（といっても流石は青葉家の別荘でヤケにデカかったが）に押し込んだハズだ。つかえ棒もして完全に出口を塞いだのに。

「なんでここにお前がいるんだ？」

「ふつ、愚問だ。漢^{おとこ}にはやらなければならぬ時があるのだ……！」
答えになってない答えが返ってきた。

「あつそ……」

「ごめんなさい、ついていけません。」

「おい！なぜそんなにテンションが低いんだ！この塀の向こうには楽園が広がっているんだぞ！」

「お前のテンションが異常なんだ・・・とは思ってたけど、言わない。」

「そんな事よりもそんなに大声出してもいいのか？」

「そしてシヨウの冷静なツツコミに慌てて声を潜めるナオト。」

「！？ 危ない、これは超極秘ミッションだった。これより先は物音一つ禁止する！」

「音立ててるのはナオトだけだな・・・」

「ユキ、極秘ミッションだって言ってるだろ！静かにしろ！！！」

「つか、お前、俺たちが黙認してやってんだから少しは自重しろよ・・・」

「その事には感謝している。俺にこんなチャンスを与えてくれたのだから！ああ神よ、アーメン・・・」

いつからこいつはキリシタンになったんだ？時々暴走するナオトはわけが分からなくなる。無理にでも追い返せばよかった。今はナオトに同情した事を後悔している。ナオトを温泉に近づけさせない策を取った香織の人を見る目もなかなかのものだ。

「へいへい。勝手にやってろ」

「ごめんなさい女湯に入ってるみなさん。俺にはこのナオト^{バカ}を止めることは出来ませんでした・・・」

第12話 勇気と無謀（後書き）

次回予告

第13話 ナオトの野望

お前らこれは漢のロマンだろ！

第13話 ナオトの野望（前書き）

ごめんなさい。

もし、この小説を楽しみにして下さっていた読者の方がいらっしやいましたら、本当にごめんなさいです。

ちよつと色々あつて・・・って言い訳ですね。

これからもいつ更新されるか分かりませんが、読んで行つて下されば幸いです。

では、短いですが楽しんで頂ければ・・・

第13話 ナオトの野望

そんなバカな会話が男湯で交わされていた頃、

「黒田さんも村上さんもごめんね。あんな先輩たちで・・・」

「眞鍋先輩が謝る事じゃないですって！来たら返り討ちにしますから！それに私の事は『沙織』でいいですよ。バカ兄貴と同じような呼び方じゃ紛らわしいですし」

確認しておくが、敬幸は女風呂を覗こうとはしていない。いや、逆にナオトの暴走を止めようとしているのだが、血の繋がった妹は兄の事を信用していないらしい。

「それじゃ私も『香織』でいいですよ！」

「ありがとう。それじゃ沙織ちゃんと香織ちゃんね。私の事も梓織でいいわよ」

「「はあゝい！梓織先輩！」」

「それにしても、梓織先輩の肌キレイですね」

「え？香織ちゃん！？」

「ホントスベスベです」

「沙織ちゃんも！？」

「「それ！触っちゃえ！！！」」

「え、ちよつと！きゃ！」

「お、おい！向こうから悲鳴が聞こえなかったか！？」

「いや、聞こえたけどさ、お前それはマズくないか？」

ナオトの今の状況、枯山水のド真ん中を突っ切って男湯と女湯の塀にへばり付いている。風情もなにもへったくりもない状態。むしろ台無し。そんな見苦しいナオトが振り返って湯に浸かっている敬幸とシヨウウに向かって指示を出そうとする。

「おい！ユキ！シヨウ！馬になれ！！！」

「やだよ」

とシヨウ。もちろん俺も、

「右に同じ」

「お前ら漢（おとこ）のロマンだろ！」

「1人でやるからこそ漢なんだろう？」

「うむ。なるほど・・・」

シヨウの適当な言葉で納得してしまったナオト。ていうか、お前が馬になってるみたいだが、覗くヤツなんていないぞ？ナオトも遅まきながらその事に気付いたらしい。1人で悶え苦しんでいる。そんな事を考えていたら、何を考えたのか、なんとナオトは塀をよじ登り始めた。

ちなみに言っておくと、塀とは言っても簡素に作られた敷居みたいなもので、どう見ても強度はありそうにない。

「「「ぎゃあ~~~~~！！！」」」

第13話 ナオトの野望（後書き）

次回予告

第14話 罪と罰

このバカ兄貴ッ！！！！痴漢ッ！！！！変態ッ！！！！

第14話 罪と罰（前書き）

当初の目標を思い出し、

どちらかの話を1週間1話更新目指して頑張ります。

では最新話、よかったら読んでいって下さい。

第14話 罪と罰

何故そんな事にも気付かないのだろう。

簡易に作られた弊により登る危険さを。

その弊により登った時に起こるであろう出来事を。

その出来事が起こった際に生じる突き刺さるような冷たい視線を。

今、俺の目の前には地べたにキスするようにうつ伏せに横たわって動かないナオトが1人。^{バカ}

そしてその向こうにはビクリして声も出ない梓織に、怒りで声が出ない沙織、あっけに取られて声が出ない香織の姿があった。

そして次の瞬間・・・

「「「きゃあ~~~~~!!!!!!」」」

「このバカ兄貴ッ!!!!痴漢ッ!!!!変態ッ!!!!」

烈火の如く怒りをあらわにする沙織。

ゴミでも見るかのように睨む香織。

いまだに泣き続ける梓織。

・・・一番年上がそれでいいのだろうか？

「兄貴ッ！ちゃんと反省してるの!？」

そんな事を思っていたら再び沙織の叱責が飛んできた。

今は露店風呂からリビングに場所を移している。

あの状況じゃ気まずいし、まともに話も出来ないと思ったから。

ただ、場所を移してもまともな話なんか出来ず、一方的に女性陣から責められ続けている。

そして女性陣3人はソファーに座り、俺とショウは床に正座。

ていうか、俺が悪いの！？悪いのはナオトじゃね！？

ちなみに当のナオトはまだ露天風呂でのびている。一度は目覚めて起き上がろうとしたのだが、とっさに梓織が投げた桶が命中し再び地べたにキスをする事になった。

「あの・・・」

「何ッ！」

「俺たち、何もしてないんだけど・・・」

「「同罪です！！！」」

「ごめん・・・」

沙織と香織の見事なハモリに俺はとっさに罪を認めるような発言をするしかなかった。

結局、謝り続け、ナオトの分もショウと二人で土下座しまくり、この旅行中ナオトが女性陣の下僕となる事でなんとか許してもらった。あいつが悪いんだし、それくらいの罰はしょうがないだろう。文句を言ってきたショウが黙らせてくれるハズだ。

土下座には付き合ってくれたが、一言も言葉を発しないショウが怒りまくっていることは言うまでもない。

第14話 罪と罰（後書き）

次回予告

第15話 軽井沢の夜
星、好きなんですか？

第15話 軽井沢の夜

「ふうゝ・・・」

軽井沢旅行の最終日の夜。

たくさん遊んだ。テニスではショウが意外な強さを発揮させたし、乗馬では俺とナオトは落馬した。（軽症でよかったよ、ホント）バスケのリングがあつたから3on3もしたし、近くにハイキングにも行った。夜には酒も飲ん・・・（いやいや、未成年なんでお酒なんて飲んでませんよ？）そうそう夜にはランプやビリヤードもした。一昨日の麻雀はキツかったな。結局一睡も出来なかったし・・・（もちろん何も賭けてないぜ？いや、賭けてても賭けてないっていうけどな！）そのせいで今日は木陰で昼寝してしまつて、もう深夜なのにおめめパッチリだったりする。

そんなわけで俺は1人別荘を抜け出し、庭で星を眺めていた。ていうか、ただの庭つていうより庭園？客室とか言つて1人1部屋だったし、ここに来て香織の家の凄さが嫌という程に分かった。

「はあゝ明後日には学校かあゝ・・・」

「ふふふ、先輩黄昏たそがれてますねえゝ」

星から目を離し振り返ると、そこにはパジャマ姿の香織が立っていた。

「ああ、青葉か・・・」

「むうゝ！か・お・りです！」

「お前だつてついさっき先輩つーたろうが！」

「あつ！・・・！」

「バカめ！」

「いぢわる・・・」

「で、お前はこんな時間に何してんだ？」

「なんとなく？敬幸がいてラッキー！みたいな？」

「んなバカな事言つてないでちゃんと寝ろよな」

「で、敬幸はこんな所で何してるんですか？」

「気苦労が多いんだこれでも。誰かさんがすぐにくつついて来るし、
恥ずかしいセリフも平気で言つて来るし？」

「ええゝそんな人いるんですか！？」

「言いながら俺の腕にからまつてくる香織。」

「ああ、今俺の隣にいるやつとかな」

「私はいいんです！だって・・・」

「『婚約者だから。』だろ？」

敬幸はため息混じりに香織の言葉を遮った。

「ついに認めてくれるんですか！？」

「いや、お前のくだらん頭ん中くらいお見通ししてただけだ」

「ま、自覚を持ってくれたつてだけで大進歩ですね」

「勝手に言つてろ」

そついい捨てて俺は再び星空に目を戻した。

「星、好きなんですか？」

しばらく隣で星を眺めていた香織が目線をそのままに聞いてきた。

「あゝどうだろ。こんな星空見た事なかったからな」

「そうですね。まるでプラネタリウムみたい。・・・行った事ないけど」

「おい！」

「だって、これまでは学校の行事とかあんまり出たことないし、自由
に遊びに行けなかったんだもん！」

「そうか・・・」

「てことで、今度敬幸が連れて行つてね」

「1人で勝手に行つてろ・・・それにこれ以上の星空は見れないと思うぞ・・・」

「ふうん、ならこのままでいいか!」

そう言つて香織は一段と敬幸にくつつくように腕を絡ませてきた。

「おい・・・」

そうして敬幸と香織は再び夜空を見上げていた。それはまるで仲の良い恋人のようで・・・

クシュン!

5月とはいえ、夜はまだ肌寒い。横を見ると香織が手をこすりながら少し震えていた。

「パジャマなんかで外に出るから。風邪引く前にこれでも着とけ」と寒いだろうと思つて着ていた上着を香織に差し出す。

「え、でも借りちゃったら敬幸が・・・」

「あゝバカは風邪引かないっつーし、お前が風邪引いたら話にならんのだろ。それともこれから何か取ってくるのか?」

「そ、それじゃ、ありがとうございます」

と香織は袖に手を通さずに羽織る形で肩にかける。

「んゝ敬幸のにおい（はーと）」

「・・・それ以上言つと返してもらつぞ?」

「はあゝいい」

第15話 軽井沢の夜（後書き）

次回予告

第16話 賭け

ちよつと散歩しませんか？

第16話 賭け

「さて、そろそろ寝るか・・・」

そう言つて、もたれかかっていた手すりから離れようとした敬幸のシャツの端を取つて香織が引き止めた。

「いや・・・」

「おいおい、そろそろ寝ないと明日がマズイだろ」

「あ、あの！」

「ん？」

「ちよつと散歩しませんか？」

「俺は昼に寝てるからいいけど、お前は寝ないで大丈夫なのか？」

「寝るよりも敬幸とのデート優先です！」

「あそ・・・」

「それじゃ、お散歩にしゅっぱあゝつつ！」

「ちょ・・・俺まだOKしてな・・・」

と元気良く宣言して香織は敬幸の腕を取つて歩き出した。

（ちゃんと拒否した方がよかったかもしれない。深夜なのにこのテンションって・・・）

ダンッ、ダンッ、ダンッ・・・

散歩の途中、バスケットコートの横に差し掛かった時、コートの隅に昼間遊んだまま放置していたボールを見つけた俺は香織に一言断つてから軽くドリブルしながらフリースローラインへ向かった。ボールを目の前に掲げ、少しの間精神統一をしてからゴールへ向かつてボールを放つ・・・

練習、10本中7本成功・・・

「敬幸ってホントに・・・バスケ素人なの？」

「ん？別に上手くないだろ？あんまりバスケしないし」

「・・・充分上手いと思う」

「そうか？俺はバスケよりもサッカーの方が好きなんだけどなあ・・・」

「ねえ・・・私の方が騙されてない？」

「なんか言ったか？」

「いや、なんでもないです」

「それじゃ、本番って事でいいか？」

「納得出来ないけど、オツケ・・・」

敬幸はボールを頭の前に掲げ、目をつぶり精神を統一させる。

わずかな照明に照らされたバスケットコートに静寂が訪れると敬幸はにわかに目を開けた。そして普段はあまり見ることの出来ないキラリとした表情を作ったかと思うと、ボールが静かにゴールに向かって敬幸の手を離れる・・・

理想的な弧を描いたボールがゴールへ向かって行く・・・

パシャ・・・

第16話 賭け（後書き）

次回予告

第17話 願い

お願い何にしようかなあゝ

第17話 願い

パシャ・・・

敬幸の手を離れたボールはゴールの網を掠めてそのまま地面に向かって行く。

見事なエアボールだった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「えーっと・・・」

「もしかして、敬幸ってプレッシャーに弱かったりする？」

「あはははあゝ・・・」

「ナイスプレッシャー！！！」

「あゝ・・・ワンモアチャンスプリーズ」

「だあーめ お願い何にしようかなあゝ」

俺、今日大切な何かを失ったのかもしれない・・・

「で、何でお前がここにいるんだ？」

「だって、何でも言う事聞いてくれるんでしょ？」

「いや、だからってこれは・・・」

散歩から帰った俺と香織は（言うまでもないが無理矢理腕を組まされた）今俺に宛がわれた寝室へと戻っていた。引きつった表情をしているであろう俺のベッドの中には何を思ったか香織が潜り込んでいる。

「あのな、いくら無邪気にしてたって無理なもんは無理なの！」

「男らしく一度約束したことは守らなきゃ」

「・・・思っんだが、お前って都合が悪くなると俺の話聞いてないよな？」

案の定香織は敬幸の話など全く聞いておらず、「早く！早く！」と自分が寝ている隣のスペースをバンバンと叩いている。

「やつは聞いてくれないんだな・・・」

そう落ち込みながら敬幸は香織の催促が止まりそうになかったので渋々ながらベッドの端に腰を下ろす。嬉しそうに敬幸のTシャツの裾を握る香織。

「逃げんから離せ、伸びるだろ・・・」

「離さないもん」

「このワガママ娘め。。」

「にや」

「お前は猫か!？」

「ウサギです!」

「は？」

「寂しいと死んじゃうんです!」

「・・・わけ分かんね」

「ところでお前・・・本気でここで寝るつもりなのか？」

「・・・」

「おい、青葉？」

「・・・」

「お嬢様、ついに強硬手段ですか？」

「すうすうすう・・・」

「えっと、、もしかして？」

「すうすうすう・・・」

「マ、マジですか・・・？」

「すうすうすう・・・」

「青葉さん、裾離してもらわないと動けないんですけど?」

「すうすうすう・・・」

「おいおい、お前は俺の理性を過大評価しすぎじゃないのか? これでも一応男なんだが・・・」

自嘲気味につぶやいた敬幸の声は誰にも聞かれることはなかった。

そして、考える人並にベッドの端で考え込む敬幸の姿がそこにあった・・・

第17話 願い（後書き）

次回予告

第18話 香織の陰謀？

俺は見ているならないものを見てしまったのだろうか？

第18話 香織の陰謀？

結局、Ｔシャツを脱いでなんとか虎口を脱出した敬幸であったが、このまま部屋にいてはただ悶々とするだけだったのでリビングの方に非難していた。

「なんか色々な意味で失ったものは大きかったかもしれない・・・というか、寝れそうにねえ・・・」

心の中の声がダダ漏れ。これから再び星を見に行くのもどうかと思つたし、テレビを付けてもどのチャンネルもテレビショッピングか砂嵐で見る気が起きなかつたので近くに放置されていた雑誌を手にとった。誰の雑誌か知らないが、女性誌だったけど暇つぶしにはなると思つて適当に開いてみる。するとバカになっていたページがあったらしく、真ん中あたりのページが自然と開かれ、目に飛び込んできた文字があつた。

『気になるあの人を落とす100の方法！』

「・・・なんだこれ？」

その1 曲がり角で偶然を装つてぶつかる！
その2 あの子の腹を掴み取れ！

・
・
・

その99 どうにもならなかったら既成事実！

この際、『100の方法！』とか言いながら99までしかないって事は問題じゃない。

……なぜこれにアンダーラインがひいてあるんだ？

『どうにもならなかったら既成事実！』と書いてある所に真っ赤なペンでしっかりとアンダーラインがひいてある。

ていうか、『その2』の左側のように既に『x』マークがしてある項目もあるし……俺は見えてはならないものを見てしまったのだから？

その前によく考える。もしかして今さっきのは既成事実を狙ったのか！？

いや、あの雰囲気であいつにそんな打算は……ないと切に信じた。

言うまでもなくこれは香織の雑誌だろう。

「ま、何もなかったんだし、これ以上考えても意味ないか……」
いくら考えても答えなんか出るわけもなく、考えることを放棄した俺は、手にした雑誌を元にあった場所付近に放り投げた。

でもやっぱりすることなくて、携帯をいじっていた俺は知らない間に意識をなくしていた……

第18話 香織の陰謀？（後書き）

次回予告

第19話 大和撫子

お前、変わったなあゝ・・・

第19話 大和撫子

「ねえ、村上くん？起きて！！！ねえってば！！！！もしもおくし？村上くん村上くん、いらっしやいましたら一番テーブルまで！！・・・しょうがない、奥の手だ！えい！！！！」

そういつて敬幸の頭に思いつきりチョップが打ち込まれる・・・

「・・・ッ！」

「あ、おはようございます」

「痛ってなあゝ・・・いったいなんだよ・・・」

「え、朝？」

「なんで疑問系やねん！」

「ていうか、俺何弁！？」

「じゃ、朝です」

「・・・で、今何時？」

「5時」

「・・・は？」

「だから、5時です」

俺が寝たのは多分4時過ぎ・・・って、1時間も寝てないじゃん！？

「あ、あの・・・眞鍋さん？」

「はい、なんでしょう？」

「なぜこんな時間に？」

「だって、こんなトコで寝てたら風邪ひきますよ？」

いや、確かにそうなんだけどね、、自分のベッドじゃ寝れない訳が・・・

「あ、ああ・・・」

「部屋、戻らないの？」

「まあ、色々あってね・・・」

「???」

「男には色々あるのさッ、ふっ・・・」

「・・・今はそゆ事にしておいてあげるわ。村上くんのおかし
いのは今に始まった事でもないしね。あと、それ似合^{あいに}ってないよ?」

哀愁漂^{あいしゅう}うハズの俺の決めポーズをバツサリと切^きって捨てる眞鍋さん
ヒドイです・・・

「そりやありがたいことで・・・で、お前はなんでこんな時間^{とき}に起
きてるんだ?」

「えゝつと、目が覚めたついでに何か飲もうかと・・・って、あつ
!」

「何・・・?」

「村上くんも何か飲む?」

「あ、ああ、ありがと」

「それじゃ、コーヒーでも入れて頂戴」

「えゝつと、俺が入れるの?」

「男の子は細かい事気にしちゃダメだよ」

「そゆ問題じゃ・・・」

「はいはい、早く入れた入れたっ!」

あの・・・眞鍋さん?なんか誰かさんのキャラ入^いってません?

「はいはい・・・」

俺はキッチンに向かいコーヒーを入れ始める。豆を挽^ひくところから
始め、ドリップさせる。さすがにウォータードリップする時間なん
てない為^{ため}ペーパードリップだが、まあそんなものはこの際^{いま}どうでも
いい。

「まあ眠気^{めいけ}覚ましにはちょうど良かったかもな」

そうしてボーっとしている間にコーヒーが出来、それをカップに入

れてテーブルまで運んだ。

「おまたせ、ブラックでよかった？」

「砂糖とミルクお願いします。」

「・・・自分で動くって選択肢はないわけね。了解しましたお姫様」

「うむ、くるしゅうないぞ。」

「はあ、・・・お前、変わったなあ、・・・」

「ん？そう？」

「ああ、変わったよ、・・・」

確か真鍋への第一印象は『大和撫子』だったハズ、・・・

「」

その面影は今なし、・・・

「はあ、・・・俺の周りにはこんなのはつか、・・・」

俺の今の仕事はこのワガママお姫様に砂糖とミルクを運ぶ事・・・
はいはい、やればいいんですよ。
ったく、・・・

第19話 大和撫子（後書き）

次回予告

第20話 取調べ

ユキ、僕は浮気は良くないと思うよ？

第20話 取調べ

「あれ？その組み合わせは珍しいね？」

「んあ？シヨウか、おつす」

「杉原くん、おはようございます」

振り返れば寝起きのくせに全く隙がない雰囲気でシヨウが立っている。時計を見ればもうそろそろ7時をさそうとしていた。いつの間にか眞鍋とかなり話し込んでいたらしい。

「二人ともおはよう。朝から密会してるとは思わなかったよ」

「おいおい、お前朝っぱら飛ばすな。密会ってなんやねん！」

「違ったの？ユキ、僕は浮気は良くないと思うよ？」

「村上くん、浮気なんて・・・サイテー・・・」

「・・・・・・」

いやいやいや、ちょっと待て！この場合の浮気の相手は眞鍋って事だよな？眞鍋さんや、お前がそれを言うのか？　って、ちょっと落ち着け！俺！浮気っていったい何だ？

『浮気：1、心が他に移りやすいこと。移り気。2、配偶者などがあひながら、他の異性と関係を持つこと。（国語辞典より）』

ま、待て！今は浮気の意味を調べてる場合じゃないな。冷静な振りしてかなりテンパってるかもしれない・・・俺、何に対して『浮気』って言われてんだ！？　いや、なんとなくは分かるが断固として違うぞ！うん、そこはしっかりしておかなくては！！！！

「ちょっと待て。お前たち、冷静になろう」

「僕たちかなり冷静だよ」

うん、やっぱり俺テンパってる気がするぞ・・・

「俺、浮気なんかしてないだろ？」

「・・・じゃあ、本気だったの!？」

「(ぽっ・・・)」

おいおいおいおい! 眞鍋さん、何赤くなってるのさ!？ボクニハリカイデキマセン・・・!!!

って、何現実逃避してるんだ俺!？落ち着け、そういえばショウが本気とか言ってたな。何が『本気』なんだ？オイラニハワカリマセン・・・

あゝ! 頭が働かない! そういえば俺ほとんど寝てないんだった・・・

・

「お前たち・・・朝からなんでそんなテンションでいけるんだ？」

「だって、面白いから? ねえ？」

「ねえ」

「・・・はあ・・・」

「でも、昨日村上さんと青葉さんが外歩いてるの見たよ？」

「・・・ッ!？ そ、そりゃ外歩くこともあるだろ。ここには6人しかいないんだから、20%の確率でそうなるだろ？」

お、俺ナイス切り返しじゃない? あとはこのままこの話をうやむやに・・・

「深夜に腕組んで歩いてただけど・・・付き合ってるんじゃないかな? たんですか？」

この娘はなんて爆弾を・・・!

「偶然ね、星見てたら外で会った。それだけだ。それ以上でも、それ以下でも、断じてない!」

「ふうん・・・」

ショウさんや、そのニヤついた顔をするのは止めてくだされ・・・

ていうか、その役回りはナオじゃなかったっけ？おぬしはオールマイティーだったのか！？

目の前には納得できないような顔をしている爆弾娘までいるし、この先どうなるんだ俺・・・

ていうか、これまで通り否定し続ける事には変わらないんだけどね。ある意味それが今の状況を作り出してる原因だって事くらい俺にも分かってるんだけど、肯定することは出来ないから・・・

この取調室と化したリビングから1秒でも早く逃げ出したい。

そして俺は激しく主張したい！

ね、寝たい・・・

第20話 取調べ（後書き）

次回予告

第21話 平和の為に

お前、今寝たらまた気絶だろ

第21話 平和の為に（前書き）

PV累計アクセス10万突破ありがとうございます。

いつ最終話を迎えられるか自分でも全く検討が付かないグダグダっぷりですが、これからお付き合い頂けたら嬉しい限りでございます。

第21話 平和の為に

「おっはよ〜」

「・・・まためんどくさいのが来た。いったい俺は何時^{いつ}になったら寝れるんだ？」

「よお・・・」

「なに？なんでユキ元気ないの？」

「さあ？ねえ？」

「朝だからじゃないですか？」

「・・・あなたたちのせいですよ！」

「いや、朝だからこそ元気に・・・」

ガコッ！

痛そ・・・シヨウも容赦ねえな・・・まあ下ネタをいきなり吐くナオも悪いけど。

「ところで、なんでユキがここにいるの？」

「・・・今度は存在を全否定ですか？」

「なにが？」

「だって、ユキの部屋から香織ちゃん出てきたぞ？」

「・・・あう・・・」

「へえ〜私は昨日村上くんが青葉さんと深夜のデートしてたの見たよ」

「ユキ・・・おめでとうー!!」

「なにがやねん！」

「お〜！お手本のようなツツコミ！」

「一瞬間西人かと思っちゃいました〜」

「（ぱちぱちぱちぱち〜）」

「・・・なに、この人たち・・・」

「ねえ、泣いていい？むしろ泣きます・・・」

「おお～よちよち・・・」

そう言いながら俺の頭をなでてくる眞鍋・・・これはいいですね？いや、いいですね？

「さて、今日のところはこれくらいにしておきますか」

「だね～十分楽しめたし」

「ユキ、GJ！」

「は・・・？」

「だって、私村上くんがソファで寝てたの知ってるし？一緒に寝てたわけでもないのに何かあるわけがないじゃないですか？」

他の二人もうんうんと頷いている。いや、ちよつと待て。シヨウはいい、ナオトは知らないだろ？

「はあ～・・・まあいいや。青葉が起きたなら、俺ちよつと部屋に戻って寝てくる・・・」

「おいユキ！寝ないほぅがいいんじゃないか？」

「え？なんで・・・？」

「だって、なあ～？」

問いかけられた他の二人も頷いている。いや、あんたらわざわざさっきの場面繰り返えし起こさなくていいから！

「だから、なんだよ！」

「今日、俺たち帰るんだぞ？」

「またへり乗るんですよ？」

「お前、今寝たらまた気絶だろ」

「・・・・・・」

見事な三連コンボでした・・・

結論から言つと、俺はへりには乗らず電車で帰った。断固拒否つてやつた。

『家に帰るまでが遠足だ！』つてお決まりのフレーズで文句は言われたがしょうがないだろう。実際に1度気絶してたし、あまり責められる事もなく、1人へりに乗らなかつたわけだ。

そして誰も俺に付き合つて電車で帰つたやつはいない。なんて薄情なやつらだ・・・

まあ、約1名俺がへりに乗らないなら私も電車で帰るとか言つてたが、お前が乗らなくて他の奴だけ乗れるわけないだろ！とへりに押し込めた。

正直、誰の為とか関係なく、俺の平和の為なのだが・・・

第21話 平和の為に（後書き）

次回予告

第22話 兄妹の絆

ふざけないでよ！何の連絡もないし、警察に届けようかと思ってたくらいなんだからね！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6243d/>

俺とお嬢様と、時々親友（仮）

2010年10月14日14時15分発行